

2002年の本。「ひねもすのたり病」

債権回収の仕事では暴力団と向き合うこともあったが、**そんなときの張り詰めた感じはきらいではなかった**。肌がヒリヒリと粟立つくらいの現場には、独特の味がある。

だからといって、体力勝負なのではない。さまざまな知識が要求される。法律一つとってみても、和議だとか会社更生法などというのもしらなければならない。登記簿謄本を読むのだって、それなりの訓練がいる。簿記や会計の知識が要求されることも多い。

取引先が会社更生法を申請して倒産したときなどは、損を少なくするためにあれこれ手を打つのだが、さらに一步踏み込んで、管財人を送り込んでその会社を再建しようということもあった。この種の仕事は二年がかり三年がかりになるが、まことに充実した日々だった。

それにしても、いったいなぜそんなに仕事が好きだったのだろう？

いちばん大きな理由は、それがきわめて**職人的な仕事**だったからではないかという気がする。

私はあのとき意地になって、地道に債権管理に苦闘する男たちの物語を書いたのだ。連載がなんとか終わると、出版社はありがたいことにそれを本にまとめてくれた。忘れもしない、八五年の十二月だった。あんなに嬉しかったことは、生涯めったにない。

しかし、同時に、自分の本が書店に並ぶというのが、かくも気恥ずかしいものだとは知らなかった。平積みになった本をまともに見ることができないのである。なんだか自分をさらしているようでいやだった。

ともかくも、書くのはもうコリゴリだと思った。消耗しきったのである。

それでも、経済的に見返りがあればべつだったかもしれないが、一年半という長い間、休日ですべてつぶしてやるほどの報酬はなかった。小説を書くというのは、とてつもなく安い労働なのである。

間もなく、私は国内審査管理室長というものになった。

中間管理職というものは、なった当座の数カ月はそれなりに新鮮である。だが、やがてつまらなくなる。

仕事に対する意欲は、次第にうすれてくる。事件の処理などというものは、**自分が当事者になってやるからおもしろいし、問題の本質もわかる**というものだ。受け身で報告を受けているのではなにも楽しくない。それに下手に口をはさめば、部下に嫌われる。職人とは、そういうものだ。

中高年の管理職に再就職のクチがないのはあたりまえである。現場感覚を喪失し、特定の企業の中でしか通用しない感覚と論理ばかりが肥大化したやつを雇う企業のあるはずがない。会議と書類で、自分が日に日に腐敗していくのがじつによくわかる。

ある在京テレビ局の情報システム部主任に転じた小西一有氏（34歳）は、山一証券が自主廃業を発表した一九九七年の十一月には、その山一のシステム管理部に勤めていた。

「営業は派手に見えるけれど、いざというときつぶしがきかないなと思ってましたね。山一の中だけの問題意識じゃなくて、どこでも通用する問題意識をもって仕事をしてきた人たちが勝つ時代になってきていて、専門性とかグローバルスタンダードといわれるのは、そういうことだと理解してました。ぼくらはどこへいっても大丈夫だけど、営業系は就職できても、多くの人は待遇は下がりますね」

・・・

もともと引く手あまたであったようだ。なぜか。

「やせても枯れても、山一証券のシステム部門ですからね。株式の売買システムだとか、約定システム、トレーディングシステムは、日本でも四指にはいるシステムをもっているわけです。それに山一の業務改革運動で得たノウハウも商品価値がある。業務の見直しをやって、システムを考えて、具体的にコンピュータをいれて、操作するところまでやれる人間はそうはいない。たとえばコンピュータの会社は、客先に売り込みにいくとき、山一でシステムをやっていた人間を担当につけるといえば、商談も有利です。いろんなコンピュータのメーカーから、いっしょにやろうよと誘われましたね。またユーザーのほうの、たとえば銀行系の証券会社にしてみれば、株式などに関するシステムのことをこれから構築するのだけれど、そんなことをやった人間は銀行にはいないから、ぼくのような人間がぜひほしい。それからコンサルタント会社にしてみれば、これからはシステムのことがわかっていないと仕事にならない」

なんだか夢のような話なのである。

・・・

「嫁さんが、こういうんですね。外資系の生活も魅力だけど、その反面、いつクビになるかわからない。偉くなれるとはかぎらない。仕事の壁の他に英語の壁もあるとね」

英語の壁？

「そう。英語は三十四年間やってこなかった。外資系コンサルタント会社の金融事業部は、英語を使えないとかなりつらいといわれた。おまえのその英語力じゃしんどいけれど、どうするといわれた。勉強するといったけど、これからやっていつモノになるか。雄弁でないと、ぼくの商品価値は下がる。パートナーになるためには、外国人と英語でちゃんと話し合いができなければだめ。アメリカとかイギリスへいって、ディスカッションして頭角を現さないといね」

システムには自信がある。だが飛躍するには、もう一つの翼が要る。

・・・

結局小西さんは、テレビ局への就職を決めた。

さて、森山さんは、三木淳夫社長（当時）がニューヨークのムーディーズへいって説明することを求める。そのときの社長とのやりとりは、いかにも大会社風だ。

「**なんでおれがニューヨークへいかないかんのだ。副社長でどうだ？**」と社長はいう。

「だめです。これまでもわが社のトップは格付け会社に対応してません。最後の危機のところはトップが行って、きちっと説明しなければなりません」

いやいや腰を上げさせたところ、今度は「ペーパーを作れ」。

「**なにをいっとるんだと思ったね。**ムーディーズで紙を読み上げる気です。これくらいの簡単なことは、サラサラいえよ、と。そうでないと、アナリストには頼りない経営者に見えるんだ。やっぱり、見てくれも大事なんです。しかし、原稿を書かないと対応できないかただったもんですから、一応簡単なメモを持ってニューヨークまで飛んでいただいて、再建策のスキームを一応約束して帰ってきたわけです」

格下げは避けられた。だが、危機は再び訪れる。

「九月か十月、ムーディーズから格付け引き下げの予告があった。最後通告です。このとき再建プロジェクトチームは、外資系との合併なり身売りなりを考えた。また、それができなくとも、山一本体を生かすために、売り物になる投資信託委託会社とか、投資顧問とか経済研究所は売って、一方本体はリテールという個人顧客相手のほうに人をシフトして、ビッグバンをにらんだ営業を構築する。そんな再建案をまとめて、経営陣に提出した。……だが、**だれも決断できなかったんですよ**」

十一月六日、ムーディーズは格付け見直しを発表し、以後資金繰りは悪化する。

しかしながら、中高年の再就職は容易ではない。「四十五を過ぎてから、まったく新しいことをやっていく自信はない」と岡田さんは思った。そして、岡田さんが同期の仲間から聞いた面接風景とは、このようなものだ。

「あなたはなにをやってきましたか」「ずっと営業をやってきました」「営業って、なにをやってきましたか」「こういうことをやってきました」「それしかやらなかったんですか」「どういうことですか」「英語は話せますか」「いいえ」「パソコンはどうです」「いいえ」「たとえば、こういうことはできますか」「そういうことは、やったことはありません」「じゃあ、なにもしていなかったのと同じじゃないですか」

で、結局不採用になって帰ってくる。そうすると、いったいおれはこれまでなにをやってきましただろうと自信喪失ぎみになって、みるみるうちに四十社あまり落ちてしまう。

男の古典的な勤ちがいの最たるものは、女性は家事がきれいではないという手前勝手な信仰だろう。

誤解である。女性の中中八、九は、家事がきれいなのである。それも、大っきらいなのだ。

きれいだが、それが仕事だし、ほかにやる人がいないから、しかたなしにやる。

女の論理とは、「きれいなものはきれい」なのだ。

「生まれてこのかた、男につくす女は見たことがありません」と、淋しいことをいったのは、会社の後輩である。この男はまだ若いのに、女性には優しくしてもらいたいという、私と同じ甘えと愚かさがある。彼は松田聖子と同年だが、ちょうどこのあたりの年齢を境にして、女性はわがままで自己中心的な顔を隠さなくなったという有力な学説がある。そういう女たちに優しさを求めるのは、八百屋で肉を求めるようなものだ。

どんなに美人でも、たけだけしいのはいやだ。美人系には、その顔だちからは想像もつかない、鬼のような女がいると聞く。がいて生意気で、わがままだともいう。男にちやほやされることに慣れているから、そうなるのであろうか。

そういえば、わがままな性格というものは、年をとっても絶対に直らないのではあるまいか。むしろ、ひどくなる。辛辣になり、たけだけしさをくわえる。なぜわかるかという、私がわがままだからだ。

わがままな中年女を見分けるのは、実はそう難しくない。整った顔だちや可愛らしさにだまされず観察すると、ひどく悪相になる一瞬がある。

この人が引退したあとで、現役時代にながおもしろかったかと訊いたことがある。

「人事だな」

やはり、そういうのである。

「こいつをここに配置して、あいつはあそこに動かして、と考えるのが楽しかったよ」

私はふたたび驚いた。

どうもサラリーマンは、ある年齢以上になったり、ある地位以上になると、そのようなのが好きになるらしい。権力と呼ばれるものの現れだろう。

人事は業病だが、もう一つ、とくに四十歳以上の人々がかかる病気がある。この病気は会社のみならず、あらゆる組織に浸透しているように見える。

「ひねもすのたり病」という。

ひがみの「ひ」

ねたみの「ね」
文句の「も」。
すれっからしの「す」。
のぞきの「の」。あるいは、のどかの「の」。
単純の「た」。短気の「た」でもいい。
恪気(りんき)、吝嗇(りんしょく)の「り」である。

出る杭は打たれるという。では、出ない杭はどうか。

「**地中で腐る**んだよ」

と、恐るべき真理を教えてくれたのは、電話会社の友人だった。
どのように腐るか。私の見るかぎり、ほぼ例外なくひねもす病にかかる。

読書量が減った、というのもそれである。会社を辞めれば、いくらでも本を読めると思っていたのに、それがそうはいかない。なぜかというと通勤時間がなくなったからである。読書は通勤電車の中で集中的にやるというのが、けいしゅうさんや私のようなサラリーマンの長年の習慣になって、身にしみついていたのだ。